

比して後出のものとして見て然るべく、書寫の字體も晚唐期に屬するものと考へて誤らないであらう。

### 三 内容の要約と本文の轉寫

さて此の經典は彌師訶即ちメシヤが岑穩僧伽の間に答へて勝法を説き、安樂道に達する道を教へ示したもので、經文の形式は全く佛典のそれを模倣したものである。其の内容は全篇が三節より成り、更に第一節は三段、第二節は二段、第三節は三段に區別することが出来る。各節・段の大體を約言すると、

第一節(1—48)では岑穩僧伽が迷ひ惑へる人衆の爲に救護の方便を問ふたのに對して、彌師訶は勝道即ち安樂道を修すべきを説き、その第一段(1—24)に、凡そ勝道を修めようとするものは先づ動・欲を除き、無欲無爲で染汚の境から離れ、清淨の源に入るべしとし、第二段(25—33)には諸の名聞を退け、無徳無聞で正眞を晤るべきを述べ、第三段(33—48)には彌師訶が無礙の六識を具有し、無邊無量の福(囉稽(稽) 浼福)を累積し、廣濟利益しながら然も自からこれを證する無きが如くであるべきを説き、此等の無欲・無爲・無徳・無證の四法を得たならば、諸法中に於る最勝の法を獲たもので、即ち安樂道と名くべきであるといひ、次に第二節(48—73)の中に第一段(48—61)では、かく無欲・無爲・無徳・無證の四法を安樂道と説けるに對し、岑穩僧伽が更に無中に樂ある所以を問ふたので、彌師訶は再び無中に於てのみ安樂道の存し、有中に於ては之が存しないことを説き、第二段(61—73)には岑穩僧伽及び諸大衆に對して、此の經の所説が神妙であつて法教流傳の根本なることを説き、これを供養讀誦受持するものは、啻に其の父祖一代二代のみならず、過